
シンクに選ばれし者

abito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンクに選ばれし者

【Nコード】

N2564Z

【作者名】

abito

【あらすじ】

小さな頃に頭に痛みが走り、次の日から空にもう一つの世界が見えるようになった。誰にも見えない世界を唯一見る事が出来た大事な人も目の前で殺された。

初めて見えるようになってから約10年の時が経ったある日、蔵で見慣れない剣を抜くと異世界に飛ばされていた。

いきなり古の魂に世界の命運を決める一人に選ばれてしまい、同じ宿命を背負わされた人の中には大事な人の面影を持つ人もいた。想いと宿命が複雑に絡み合う異世界での冒険が始まる。

第01話 非常識の始まり（前書き）

この話の中で神様について書いておりますが、内容につきましてはあくまでフィクションです。

気分を害された方が居られましたら、深く謝罪致します。

初心者ですので、誤字脱字が多く見られるかもしれませんがどうぞお楽しみください。

第01話 非常識の始まり

好きな言葉は常識。嫌いな言葉は非常識。

なのに、俺の日常は非常識だ。

いきなりなんだと思うが、俺の視界には通常見えるはずのない物が見えている。

俺の名前は、神城 怜治。

裏に道場が併設されくらい家はデカく名家の長男。

健全な精神は健全な肉体に宿るを地で行く親達のお蔭で、武術と現代日本にとって無駄スキルを小さい時から鍛えられ、ありえないレベルになっている。

俺にはみんなと違う所がある。

俺が6才の時に突然頭に痛みが走った。その時は理由が分からずに、気にも止めていなかったが、次の日から空に逆さづりの大陸が見えるようになった。

理由も分からずに、まず母さんに話したが見えていなかった。

次に友達に話したが誰にも見る事ができずに、帰ってくる言葉は嘘つきしかなかった。

親達は見ることが出来なかったが信じてくれた。けど友達は、最後まで誰も信じてくれなかった。

1人を除いては……

藤堂 由佳・・・今は亡き俺の幼馴染で多分初恋だった子。

出会いは6才の時に、近所の狂犬に追われてれている所を力づくで助けたのが始まりだった。

最もその時は大陸話で色々あって犬に八つ当たりするように黙らせただけだけだが、話してみると大陸を何も疑わずに信じてくれた。

なぜなら由佳にも見えていたからだ。

仲良く乗るのに時間は掛からなかった。

由佳も大陸が見える事に不安を感じていたのだ。

「今なら怜君ともう一つの世界を見てみたい。一緒に行ったら私を護ってくれる」

「言われなくてもまた助けるし、僕が由佳ちゃんを護るよ」

即答で返していた。

その時の由佳の笑顔と同じ物を見れる理解者が居ると知っただけで少しだけ元気になれた。

親に無理やりだが武術を教えて貰って、自分は強いという自信もあった。

しかし、一ヶ月も立たない内に突然通り魔に襲われ、俺も由佳も刺されて倒れた。

「イタイヨ・・・」

助けてを求めるようにこっちを見た由佳を見ながら気を失った。

由佳は死に、俺は生き残った。

そして、由佳の遺品を1つだけ貰い誓った。

「強くなりたい！」

親達が武術を無理やり教えるのではなく、自分から道場の師範代の爺ちゃんに頼んだ。

「何の為に力を付ける」

「由佳ちゃんと約束したから！」

俺の目を見ながら爺ちゃんは言った。

「教えた事には矜持を持って！信念を持ち、力ではなく心を鍛えろ！」
言っている意味が分からず首をかしげるしかなかった。

「自分を見つめ直せばいずれ分かる。途中で辞めぬなら鍛えてやる
う」

「お願いします！」

当時6歳だった自分には色々な感情が渦巻いてよく分からなかったが、由佳とした約束が自分を動かしていた。

「あれから10年・・・あそこに行けたとしても、お前を護る事
なんてできないのにな」

学校からの帰り道に首から下げている六角水晶のペンダントを触りながら空を見上げれば、昔と変わらずもう一つの世界が見えていた。

「頭で理解しても辞められないんだよな。爺ちゃんの言った言葉も
理解していないらしいし」

小さい時の決意表明から、爺ちゃんには剣術と組手と家業の刀造り
などを教えて貰っている。

母さんは弓術を教えるようになった。弓術は色々な面で良いとして
素直に習っている。

妹も小さい頃から擦り込みのように持たされて育てられている。これ等は小さい頃の決意表明内だからまだいい。

親父に限っては別だ。年を追うごとにキツクなっている。

家の道場で現在の師範代として剣術や組手を教えるのはまだいいが、山でのサバイバル訓練を称した山登りなんて意味分らない事から始まり、夏休みに海外旅行に出かけたと思えば途中で気絶させられてジャングル生活を余儀なくされた。

動物を相手に狩りまでした時には、俺の常識は何処に置き忘れてきたのかと思った。

最後には諦めの境地に達して、非常識こそ常識として受け入れるが座右の銘になった。

お蔭で、常識の範囲が人よりかなり広くなった。だから大概の事は、常識として受け入れられるようになってきている。

他人からみたら、あなたの常識は世間の非常識だと言われるくらいのレベルだ。

言われた時はへこんだが、親父よりは常識人だと思っている。

家に帰宅した。

ドアに手を掛けた時に嫌な予感がした。

「なんだ！俺の心の厄介警報が告げている。やばい開けたくない！」

ジャングルや親父に何度も精神的に、時に物理的に命の危機にあわされ続けて身についた危険察知だ。

すでに予知といっても過言ではない気がする。

ドアを開けて迎えてくれたのは爺ちゃんだった。

にんまり笑っているという事はまただろ。

「ただいま……その顔は、また作ったの？」

扉で迎えたのは、神城 怜心。今年御年75歳の爺ちゃん。

「今日のは蔵に眠っておった、とある滅びた国の言葉だ！」

以前に蔵に忍び込んでみた事があるが、この世界の何処にもない言葉？の巻物やら壺やら刀剣類から火縄銃などの骨董品の山だった。

「だああ意味分からねええ！！滅びたのは、爺ちゃんの頭の中でさつき滅びたばかりだろ！何でいちいち労力使って変なもん作っているんだああ！！」

「解ければ小遣い、解けねば……」

「解けねば何？？怖いから早く言って！！」

俺が記憶力が良くなった最大理由がこれだ。

爺ちゃんが作る暗号文や速読などの暇潰しの玩具にされ、おかげで語学や記憶力の方はかなり高いレベルになった。

これ以外は、殆んど全面的に最も尊敬している人なのだが、これだけは尊敬できない。

今日の暗号は、完全に記号の文章だった。

手帳にメモしてある内容との酷似は殆んどない。

毎度の事ながら75とは絶対に見えない元気溘刺っぷりで、なんでこんなのを作れるのかいつも疑問に思う。

以前など親父まで一緒になって、どっかの古代語が出てきてヒントを貰って基本パターンを読み解けなければ絶対に解けなかった。

尊敬を通り越して呆れた。

ポケ防止になっていいらしいが、ポケる所が全然思い至らない。
刀を鍛えている時や道場に居る時の姿からは、年齢誤魔化している
だろうと言いたくなる。

結局今日は解けずに、道場で親父の神城 怜也と一緒にあって投げ
飛ばされた。

家の秘伝らしいのだが、脳のリミッターを外すとか言う方法を取っ
ているせいで本当に飛んでいるのだ。

その親父も我が家最強の母親、神城 彰子の逆鱗にでも触れたのか
コテンパンされていた。

そして、最強の母も歳の離れた妹の神城 玲奈には精神的に負けて
いる。

あれ……俺の家族内ピラミッドの最下位？とか考えた事が何回
もある。

玲奈は俺に優しいから問題ないな。

親父も溺愛しているから手を絶対に上げない。

「女性と子供には優しくするものだあ！」

とか女性関係の格言みたいな事をで量産していて、それをバカ正直
に護っている所は素直に尊敬はしている。

子供なのに、なぜか俺には優しくない。

以前にそれを文句を言ったら……

「玲奈は可愛い女の子なんだ！怜治は自分で何とかするだろ。その
為に色々教え鍛えている！」

前にテレビで見て、これをやらせてみよう。とか言ってやらされた物がある事を知っている。

そう言うのは大概身に付かなかつた。詰まる所、思考が子供なのだ。

「そんな反応なら、玲奈が彼氏を連れてきたら大変だな！」

その時は定番のセリフだなと思って言っていた。

「私を斬り倒していける者でなくては玲奈はやらん！」

母さんとの結婚の時に先方の親が同じことを言って、本当に親を斬り倒して認めさせたらしい。

親父には道場で薄皮を何回も切られているから分かるが、勝てる奴は早々いないだろう。

「そんなんじゃ。玲奈は振られて御終いだな！」

「玲奈のどこが不服なんだ。そいつは許さん！」

その後ヒートアップしていくのを見かねて、母さんが殴打して引きづられて行く所を何も言えずに見送った。

なぜおふくろと言わないかって・・・怖いからに決まっているだろう。

やばい電波を受信したような。

道場での訓練後に飯を食べた後で暗号解読を始めた。

「わからねえ！こんな時は道場で体を動かすか」

刀とメモ帳を持ちコートを羽織って道場へ行こうとした時、突然頭

に痛みが走った。

「蔵・人・光・・・泥棒か？」

嫌なイメージがした事で不安感があった。

同時に少し嫌な予感がして、短刀も腰に隠し持って出る事にした。中に入ると少しだけ埃っぽく薄暗く先が見えない。

「誰もいないな…良かった」

帰ろうとすると、物が落ちたようなガシャンと音がした。

瞬間的に、鞘状態で短刀を抜いたが誰もいなかった。

先に進むと剣が落ちていた。

この倉には、刀剣類もかなりあるがこれは見た事が無かった。

「反りが無いし日本刀ではないのか？」

疑問に思いながら剣を引き抜くとカチつと音があった。

瞬間、鞘から剣が抜け突然光だした。

光が納まるとそこには誰もいなくなっていた。

第01話 非常識の始まり（後書き）

お気に入り登録をしていただけたら嬉しいです。

誤字、脱字等ありましたら、報告をお願い致します。

ご感想、ご批判もお待ちしております。

それではまた次話の投稿をお持ちください。

第02話 異世界召喚

気が付けば森の中だった。

空には青い空が広がっていた。

「あれ！霧が掛かっているけどなんで大陸が見えずに青い空が見えるんだ」

周りを見渡すと人どころか、生物のいる気配すらしない。

見た所深い森だが、鳥や虫の鳴き声が聞こえてくるものだがそれすらない。

この時点で、異常だと認識が強まった。

「もしかしてここは空の大陸か」

何か確信めいたものを感じた。

遭難したら山なら動くなが基本だが、助けが来ない異世界ならば当てはまらないだろう。

なにより生物の生きた気配がないのが余計に不気味だ。

「早くここを離れた方が利口か。何か気持ち悪い」

目が覚めてから体の中に何かが入り込んだような嫌悪感があった。

独自の病気かもしれないと思い、動ける内にこの森を抜ける事にした。

まずは、持ち物確認をした。

服装は、スウェットの上下にコート。

刀に短刀が3本とタオルとメモ帳にペンと首から下げていた六角水

晶と剣が無くなっていた。

この世界に来る切っ掛けとなった可能性の高い剣が無いのは正直痛い。

手掛かりもなければ、食料もないのは絶望的だ。

「由佳・・・もうすぐそっちに行くかも」

メモ丁などはポケットにいれ、短刀で木に目印を刻みながら真っ直ぐ歩き始めた。

しかし不可解な事にいくら歩いてても外に出られない。

「動けるけど、やっぱり違和感がある」

今までになかった物が体に流れている感覚だった。

数時間歩くと、目印の付いた木が見つかった。

「おかしい！きっちり目印をつけて歩いているのに元の場所に戻るなんて」

それから、目印をつけながらさらに歩き続けるとかなり立派な祭壇があった。

祭壇の上には、立派な石碑が並んでいる。

「なんだこの祭壇は？」

随分立派な祭壇だな。

少しだが知的好奇心が湧く石碑だ。

『揃った』

「誰だ！！何処から話している」

良く分らない言葉が掛けられた。
後ろの祭壇の文字が光輝いている。

「なんだ！困まれた！！」

光のベールみたいな物が祭壇を取り巻き、光の中にいるような感じになった。

『私は世界の均衡を執る神器の担い手。全ての生命の母となる者』

いきなりビツクリ発言が来た。

『世界の柱の一つレストアのシンクに選ばれし者よ。古の契りに従い十神器を束ねよ』

「意味分らないですけど！」

『三聖器の担い手と共に、再生の未来か破壊の未来かを選ばなければならぬ』

無視ですか。

『それが、三聖器に選ばれし担い手の宿命』

宿命ならば、なぜあからさまな外来から選ぶんだ？

もしかしたら・・・いやそんなファンタジーな事は、って今の状況が一番ファンタジーだった。

『今世界は破壊の未来へと進んでいる。このままでは、選定の前に封じられし神が復活し世界が破壊されテリウスの元に魂が全て還るだろう。そうなれば、あなたも巻き込まれるでしょう』

「何この一方的で、面倒な臭いしかしてこない話は！」

俺にとって護るべき相手がいない世界ならどうなるかと良いんだが、理由もなく殺されるのはゴメン被る。

『世界を再生の未来を望むなら、破壊の未来を進もうとする流れを止めねばなりません』

逆に言うと無視すれば破壊の未来になる。

再生と破壊なら常識的に再生かな？

「望む望まないに関らず巻き込まれるなら、こんな非常識な事を許容する気はない」

『あなたが望みを叶える為、闇を切り裂く刃“聖神剣ブレイブセイド”を授けます』

浮かび上がった剣えお見てハツとした。

出てきたのは蔵にあった剣だったからだ。

「何でお前がそれを持っているんだ。さっきまで俺が持っていた筈だろ！」

『私は古の魂を導き繋げた』

この剣が俺を呼んだと言う事か？

俺はある程度の武器は使える自信はあるけど、この困った状態では授けると言うより押しつけな気がする。

「この押し付けっぷりは、親父と良い勝負な気がする」

神ぼいのと良い勝負って、どれだけ内の親父はふてぶてしいんだ。いやだなくなんかそう思うと凄く触りたくなってきたんだけど、逃がしてくれ無さそうだよな。

なんである時に、厄介警報が鳴らなかつたんだ。

「はア〜〜これで後戻りはできないのかな」

大きなため息をついてから、剣に触れると強烈な光が放たれた。

「ん！俺の中に何かが入ってきてやがる」

一瞬痛みを感じた後に何か体が体の中に流れ込んできた。

『旅を続ければ、あなたの望みも叶うでしょう』

「どうゆう意味だ！う・・・」

強烈な光に飲まれ目を瞑った。

気付くと祭壇が古びた物になっていた。

「何なんだよ。一体・・・」

目の前には古びた祭壇を見た。

「さっきの祭壇みただけで風化してる」

石碑を見ると知っている文字もある。

これはと思い出すと、合作の暗号文字の一つだった。

急いで、纏めたメモ帳を出し解読を始めた。

セイシンケンブレイブセイドメイクニヨツテケイショウスル

セイケンノウウシャ・・・

「聖神剣ブレイブセイド盟約によって継承する。聖剣の勇者・・・

・他の部分は削れていて読めないが、盟約した覚えなんてないし、
剣自体が消えているんだけど」

直訳でこんな所だろう。

いつもだっただら意味分かんねーとか色々ツツコミたい内容が多々
あるが、まずは一つ。

「どこから読み方のヒントを貰ったんだ！偶然ならばどんなエスパ
ーだよ！」

俺の周りは、個性派揃いの非常識な人しかいないのか！

「まったく、異世界が見えたら異世界召喚！常識だね・・・」

頭を抱えて唸ることになった。

これも受け入れなきゃだめなの？見える時点で常識からかけ離れて
いたのに、幾ら座右の銘でも行き過ぎだろ。大体由佳がないのに、
俺一人で何をしろって言うんだ。

「どうして・・・ここに人間が」

声をした方を向くと、金髪でワンピースを着た10cmぐらいの妖精がいた。

「夜に蔵に行けば剣があり、剣を抜けば森に召喚され、祭壇で神様？ぽいのと会って、最後には妖精？・・・どんだけ俺の常識の範囲を拡張すれば気が済むんだこの世界はあああああ！！」

適応能力は高い自信はあった。

だがいい加減言わないと、この非常識な流れに頭が着いて行けなくなる。

「ちよつと！！どこに逃げるの」

祭壇から飛び降りて、妖精を追いかけるが相手は飛んでいる為に中々追いつけない。

地形が不利だったがどうすればいいか。

「待ってくれ！！」

少し放され、見失っても真っ直ぐに走った。

しばらく走ると赤毛の長髪で中世の神官が着そうな白い服を着た女性の後ろ姿が見えた。

「クレハ大変なの。変な服を着た人間がここに来て、変な事を喚いてる！」

「ベルそんな訳ないじゃない。ここは聖域なんだから」

クレハと呼ばれた女性の話を聞いていると黒い犬が飛び出してきた。

「危ない!!」

咄嗟に蹴りを入れ、クレハと呼ばれた女性の前に立って立った。

「え！デスハウンド。どうしてここに！」

後ろでここは聖域なのにとか言っているがなんだ？

「ちょっと良く知る動物とは違うが、あれくらい大丈夫だ！下がってい……由佳」

振り返ってみた顔は紛れもなく幼馴染の由佳の面影がある顔だった。きつと由佳が、髪を赤くし色々成長させたらこんな姿になるのではないだろう。

「由佳？私はクレハよ！」

言葉が通じている。

さっきの剣の御蔭なのか？

「ちょっとクレハ……仲間を呼ばれちゃったみたいよ！」

周りを見ると敵つい黒犬が5匹ほどいた。

「その喚いていた変な人。そんな刃剣で戦うなんて無茶よ」

刃剣って日本刀の事かな？
だったら問題ないな。

「俺はレイジだ。それと小さな女の子に護られたら男のプライドに関わるから手伝うよ」

全長10cmの妖精に言われ反論する頃には、風の塊が跳び黒い狼が吹き飛んだ。

「凄・・・今のは魔法か？」

「当たり前じゃない！妖精族はみんな魔法が使えるんだから」

また俺の常識の範囲が拡張された。

何か突き抜けてしまったようで心が痛い。

「なんでここに、人や魔物が入り込んだのか知らないけどあなたは下がって！」

クレハが呪文を唱えると光の波動が跳び狼が一体倒れた。

「やばいこのまま終わったら、俺は役立たずに」

飛び出し一体のデスハウンドに向かって走り出した。

敵もこちらに気付いて飛びかかってきた。

「あれ・・・動きが鈍く感じる!!」

体に何かが流れる感覚を持ちながら一閃すると、首が斬り落とされ血を吹きだしながら倒れた。

「ウソだろ！こんなに相手は脆いのか？」

倒した敵を見ながら、言い切った瞬間後ろからまた襲ってきた。

「弧裂斬」

振り返りながら、振り切ると狼はあっさりと斬り伏せられた。

今の一撃には刀にも力が流れた気がしたが、今倒したのが最後の一匹だった事で周りが静かになった。

side out

最初は簡単な作業だった。

神殿の裏にある道から入り、祭壇にパルトナ大神殿の上級神官として祈りを奉げる為だ。

その任に何故付いたかと言うと、聖杖の巫女の有力候補とされているからだ。

でもそんなものにはなりたいと思わない。

「クレ八大変なの。変な服を着た人間がここに来て、変な事を喚いてる」

「ベルそんな訳ないじゃない。ここは聖域で結界内なんだから」

不審者かしら？でもこの聖地を汚す人なんていない筈。

パルトナ大神殿の私有地であり、フェリアス国の第二都市エルミナでもある。

こんな所で問題を起こせばすぐに捕まってもおかしくない。

そう思っていた瞬間、黒髪の男性が飛び出し何かを蹴り飛ばした。蹴り飛ばした方を見るとデスハウンドがいた。

おかしい！！神殿の結界がある筈なのに。

魔物としては下級の固体だが、普通の人間には脅威。

男性が持っている珍しい刃剣も付加の魔法が掛けられていない刃剣のようだ。

私を誰かと間違えている上にあれでは勝てない。

ベルのエアショットを見た後で走りだし、刃剣を一閃すると狼があっさり切り倒された。

それに一瞬だけけど魔闘術を使っていた。

見たことない服装を着た不審者だけど凄い！

それに、似てる……。

最後の一匹に目を向けると後ろから男の人を狙っていた。

危ない！

そう思った瞬間彼が持っていた剣を高速に振りぬきデスハウンドを斬り倒した。

第02話 異世界召喚（後書き）

閲覧ありがとうございました。

第03話 パルトナ大神殿

デスハウンドを倒す事に成功した後で、刀に付いた血をタオルで拭いて鞆に納めた。

「あなたは何者なの？野党って感じじゃないわよね。冒険者ギルドの方ですか？」

自分が知っているギルドかは知らないが、そんな組み合わせがあるんだと思いつながら想像した。

「俺の名前は、神城怜治って者だ。さっき気が付いたらその妖精さんがいた。序でにギルドなんて入っていないぞ！」

「カミシロレイジ・・・」

「もしかしたら、レイジ・カミシロなら分かるかな。レイジでもいいよ」

「レイジ・・・」

「で・・・君の名前は？」

この由佳に似た同じ年ぐらいの女の子に興味が出た。

「私は、クレハ・リュエル。パルトナ大神殿の神官！それとベルは妖精ではなく精霊よ！」

「それは、すみませんでした！」

妖精と精霊ってどう違うのかな？余り突っ込んでいると藪蛇になりそうだ。

「クレハ！名前よりも急いで神殿に戻った方がいいんじゃない。魔物がここに現れた事自体が問題なんだから」

「そうだったわ！あなたも一緒に来てくれない」

2人が走り出したのを見て着いて行く事にした。

夜の道を通り長い階段を上ると大きな建物から黒煙が上がっていた。近付けば近づくほどに戦禍が見えてくる。

「アリアこれは、どうゆう事なの」

トラ耳の女性にクレハが声をかけた。

リアルな獣耳みて、俺に常識という平穩を求めてはいけない物なのかと悟り始めていた。

「クレハ様。いきなり魔物が湧きだし神殿騎士が迎撃にはいりませんでした。町にはグラドル様とエイナ様が出ています。地下の最奥殿にはミルリア様が向かいました」

「普通逆じゃないの？ミリアがまた暴走してこうなったのね」

御爺ちゃん大丈夫かしらとクレハが呟いた。

「ミリアならあり得るわね」

おいおい話を横で聞いていると、ミルリアは強いがお調子者でそれ

でも頼りにはされている。

愛称がミリアなんだろうなと思いつながら話を聞いていた。

「クレハ様そちらの方は」

「私の護衛よ。今は急ぐから説明は省くわ!」

そのまま、話を終わらせ神殿の中に入ると通路の各所で戦闘がくり広がられ、双方の死体が転がる戦場と化していた。

「いきなり戦場ってランクが高過ぎないか?」

そう言いながらも魔物を斬り捨てていた。

動物を切った事があるが、人間の死体をまざまざと見せつけられると気分が悪くなる。

流石にゲリラの紛争地帯には行った事はなかったので、生物が焼ける臭いも気分を落とすのに拍車をかけた。

「ここから戦いが激化すると思うけど、レイジはどうする。逃げる?ここを手伝う?それとも私を護ってくれる?」

その言葉を聞いた途端、クレハと由佳がダブってしまった。

落ち込んでいた気分が一気に逆転した。

そんなの決まっている。

「クレハを護るよ!」

由佳とダブらせた後に、クレハの顔が笑顔を見ると本当に笑い方で由佳にそっくりだと思った。

10年会っていないかったのに、顔をしっかりと思い出していた。

「じゃあ行くわよ！」

クレハの一言で周りで戦っていた騎士が一気に援護に周って来た。その存在感は、位の高さを感じさせるモノだった。

「なあべル。クレハって実はかなり偉かったりする？」

「このパルトナ大神殿では確かに上ね。普段は面倒くさがり屋なんだけどね」

「そうなんだ・・・」

走りながらさつき倒したデスハウンドや小悪魔のような妖精や炎の霊を切り倒しながら先を進んだ。

地下に行くほどに魔物が湧いて来ているようだった。

戦いの中で基礎能力が高まっている事が分ったが、火球が飛んで来るのは恐怖の一言だ。

「護衛なのに攻撃を避けないでよ！」

「あんな炎なんて刀で防げるかあ！さつきから悪魔みたいな奴等はなんなんだよ！」

「悪魔？ファルとイビルウィスは下級の魔物よ。本当に悪魔クラスが出てきたら大変よお」

「イビルって付いてるじゃん！」

連続で切り裂いていければ、いずれ切れ味が無くなってくる。

よく分からない力が刀に纏わせて戦っていたが、確証のない事はしたくなかった。

そう思い刀を納め、落ちていた剣を一本拾って攻撃を加えた。

地下に降りてみると道の脇には水が流れ、町に繋がっているのが光が見えた。

そんな地下では声が響いていた。

「どんどん向かってきなさい。僕の槌で潰しちゃうよ！」

地下はどれだけピンチかと思えば、元気に槌を振る10歳ぐらいの褐色の僕っこによって、魔物が死屍累々となっていた。水路の一部が赤く染まっている。

「もつと齒ごたえのある魔物はいないのかあ！あれクレハ！」

クレハが光の弾を放ちながら女の子の元に走って行った。

「ベル・・・あの体格に不釣り合いな槌を振う少女はなんだ？」

耳が少し形が違う事で人間ではないのは分かるが、120cmぐらいの細見の体で槌を振りまわしている姿はシユールだった。

「彼女は十神器の1つ神槌デイルドの担い手で、ハーフトワーフのミルリア・カイウィン何だけど・・・性格は見た通りよ」

見た感じに疲れた顔になったベルをみて、内の家族を見るように一瞬で悟った。

「苦勞しているんだな。ベル・・・」

「これが分かると言う事はあなたも似たような境遇なのかしら？」

顔を見合わせて同士を見つけた。

「ハア〜」

「クレハ・・なんでベルだけでなく隣のお兄さんも溜め息ついているの」

「さあ〜なんでだろうね？」

クレハは苦笑いをしながら答えを言わなかった。

「最奥殿はどうなっているの？」

「分からないよ！ここまで倒して来たけど、最奥殿の方から出てきているみたいなんだもん！」

ミルリアが槌を振るえば床や壁にスプラッタな貼り絵を量産させながら敵が絶命して逝き、イビルウィプスにはクレハの光魔法で片づけ、回り込んできた敵をベルが弾き、早い敵は全員苦手なように俺が切り捨てて先に進んで行った。室内では魔法や大技が使い辛いよ
うだ。

「ミルリア危ない！」

天上から蝙蝠のような魔物が襲ってきたので切り捨てた。

「お兄さんありがとう」

「別にいいよ」

「お兄さんなら、ミリアと呼んでほしいな」

「分ったよミリア！」

頭を撫ぜると気持ちよさそうに目を細めていた。

この感じは玲奈を思い出すなあ！今頃心配しているのかな？

「あれえ？何時もの子供扱いするなはどうしたの？」

「なんか、お兄さんの手は安心するからいいの！」

「随分気に入られたみたいね！」

「そのようだな」

少しだけ笑いを挟んで、最奥殿へと進行した。

「もうすぐ最奥殿よ！」

「ラストオー！」

最後の敵もミリアが倒して、最奥殿の扉が見えてきた。

敵ももういないと思っていた時に、神殿の扉の中で爆発音が聞こえた。

急いで扉を開け放ち中に突入すると、其処には尖った耳と個性的な服を着たナイスバディーなお姉さんがいた。

思わず顔が緩んでしまったが、宙に浮いている2つの鎖鎌によって

すぐに顔が引き締まった。

「石碑が壊されてる！大事な碑文なのに！」
オルシェ

「それだけじゃないわ！あれは十神器の神鎌ビュート。なんで担い手がこんな事をするの」

「は？あれも十神器！！あの姉ちゃん何者だよ」

「我が名はレミア。石碑が邪魔だから壊れて貰ったわ！」

さっそく敵っぱいのとエンカウトとは、やってくれるな。

情報も調べずに、速攻で敵対状態に入るのは好ましくないんだけど。

「ふん！丁度継承者と聖杖の巫女候補の実力でも見て行こうかしら」

鎖鎌を投げると、鎖が伸びクレハを襲った。

クレハの前に飛び出し、また剣に力を流しながら払う事で鎌を弾く事に成功したが剣に輝が入った。

「鎖が伸びるだけでなく、打ち払うだけで剣に輝をいれるってどんな威力だよ！」

残りの剣は、受けが余り得意と言えない刀と短刀しかない。

大体俺は女性とは戦いたくない。女性に手を挙げたなんて知られたら親父に這った押されそうで怖い。

異世界ならば気付かれないだろうけど・・・ダメだなんか直感で気付きそうだ。

ここは・・・真剣を向け合ったならば手を抜くな！だよね爺ちゃん。

よし！これで誤魔化そう。

「まさか、魔闘術と魔術付加の両方を使う護衛がついているなんて流石巫女様ね。でも不破どころか不滅の魔法も付けない武器を持たせるなんて程度が知れるわ」

レミアは、鎖で鎌を簡単に引き寄せてから鑑定するかのような目で見えた。
ねっとりした視線で嫌な汗をにじませた。

「魔闘術意外にもこんな事が出来るなんて・・・」

「クレハは気付いていなかったのね」

結構使っていたのに見てなかったのか？
それとも、纏えている時間が短すぎるのもあるかもしれない。

「でも残すところが刃剣ならば、これでリーチよ」

避けても受け流してもクレハ達が危ないかもしれないと思い、輝の下に位置でもう一度迎撃の態勢に入るとミアアの槌が鎌を弾き飛ばした。

「僕を無視しないでくれる！」

「神槌のミアア。今はもうあなたより、男の子の方が興味あるわ。持ち帰って食べてもいいかも思ったのに」

「いきなり敵さんにモテても嬉しくないし、カニバリズム食人嗜食な人なんて御免だ！」

「言っている意味が多分違うわよ！」

「それ以外何があるんだ？」

ベルがよく分からない事を言っているが、状況はまずい。相手はどう見ても人間っぽく見えない相手で、武器の格が違い過ぎる。せめて受け流せばいいんだけど、この位置では弾くしかない。せめて、あの剣があれば・・・

「なに？」

後ろを振り返るとクレハが光に包まれていた。

俺自身もクレハと共鳴するように発光していた。

「なんだ一体！」

すると後ろで、クレハの手には白い杖が虚空から抜き取られた。

俺の方は、透明に青い剣が浮かび上がるが直ぐに砕け散って消えた。

「聖杖の巫女が目の前で覚醒するなんて・・・それに聖剣の勇者・・・これは力を知っとくべきかしら？」

レミアが発した後で、地面に魔法陣が現れ光の中から2mほどの長い牙をはやした狼が二体出現した。

「サーベルウルフを召喚で出すなんて」

サーベルウルフが飛びかかって来たのにいち早く反応して剣を振ると、歯で剣を受け止め輝が入っていた為か、あっさり噛み砕かれた

が押し戻す事が出来た。

直ぐに、短刀を投擲して上手い事に右目を貫いた。隙ができたと思
い走り込み、更に追撃に居合いで首の柔らかさそうな所を切り裂き一
気にレミアの間合いに入り込んだ。

「させないわ！」

鎌を投げつけて来るが、今回は受け止める必要がないので受け流し
た。動きは鈍く感じた事で、一瞬で喉元まで刀を押し付けることに
成功した。

「こちら情報を知りたいんでね。色々吐いて貰うよ！」

「流石聖剣の勇者の魂シンクに選ばれた人間ね。でもいいのかしら」

「何!？」

後ろでは、ミア達がサーベルウルフのスピードに手を焼いていた。
援護に行きたいが、こいつを逃がす訳にはいかなかった。

「あなた達はまだ殺したくないのよね。でも、殺しちゃおうかしら」

剣を外し一発腹に入れようとしたが、鎌がガードに入ってきた。攻
撃が入らなかつた事で、バックステップをするように後ろに下がっ
た。レミアが何か石のような物を砕くと光に包まれ始めた。

「今日はこちらまでにするわ」

「待て！」

刀の峰の方で振りぬいたが、レミアが光に包まれるのが少しだけ早くこの場から消えていった。歯噛みをしながら、すぐにミア達の援護に回った。

サーベルウルフは壁を蹴りながら高速で移動を続け、ミア達の決定打を避けていた。

なぜか、クレハが固まっているように動いていなかった。

「直線的に向かってくる敵ならば、カウンターで合わせて斬ればいいだろ！」

言いながら、足を斬り動きを緩慢になった。

「どいて！ミア」

突然クレハが動きだし、聖杖を前に構えた始点に光が収束させた。た。

「打ち抜いて！セントバレット！」

聖杖から発射された白光の光がサーベルウルフを飲み込み倒した。

第03話 パルトナ大神殿（後書き）

閲覧ありがとうございました。

戦闘パートは上手く書けていたでしょうか？

第04話 生活の基盤

レミアに逃げられたが、サーベルウルフをクレハの光線で後ろの壁にもかなり大きな輝を入れていたが、倒す事に成功した。地下の屋内でやる技ではない気がしたが、声に出さずに心にしまっておいた。その後………

「凄いよ！クレハ！！今のは聖神杖ファルトカウルの技なの？それに……」

ミアアがこつちを見た。

「聖神剣ブレイブセイド……婚約者候補が恰好良くて強いお兄さんで良かったね。あの人の事は、クレハも嫌がっていたもん」

「そうね。でも今は言わないで。聖杖の巫女になってしまった事と今やってしまった技の事で、頭がいつぱいなんだから」

「泣きたいのは分かるけど、上の援護か扉の護衛に行った方が良いんじゃない」

今さらりと爆弾発言が聞こえた気がするだが、きつと気のせいだな。

聖神杖フォルトカウルとか婚約者候補とか……

「よし。逃げよう！」

抜き足状態で部屋を出ようとすると呼び止められた。

「レイジ様・・・どこに行く気ですか」

「やだな〜様なんで、ちょっと外に行くだけだよ。ベルさん」

「絶対逃げようとしているでしょ！」

「後生だああ！俺の厄介警報が最大レベルに警報を鳴らしているんだ！苦勞精靈の同士ベルさんなら分かるだろ！」

ベルならばここから離れることがいかに大事か分かってもいい筈だ。何となくだが、同じ痛みを知っているような気がするのだから。

「いつ同士になったのか分からないけど、この状況を私に押し付けて逃げるなんてできると思ってた？」

「ですよね〜」

俺だったら首根っこ抑えてでも絶対逃がさん。

おかしい！10cmの精靈に言いくるめられている。

「お兄さん！僕も護ってえー」

いきなりミリアが首をロックするように背にぶら下がって来た。

「何かな藪から棒に・・・てか締ってい・・・る」

「えええ！！クレハには護るよ！と言ったんでしょ。僕も一緒に護つてよ！」

ヤバイ息が・・・

「ミアア・・・早く放さないと彼が死んじゃうわよ」

「え！？ごめんねお兄さん」

膝をついて肩息しながら生を実感した。

今日の中で一番死にかけた出来事だったと思う。

「やっぱり警報通り逃げるべきだった！」

「凄いの中率ね」

ベルが同情の視線を送ってきている。

まじ悲しいからやめてくれ！警報レベルから考えてこの程度じゃすまない気がするんだから。

「お兄さんが持っているのって刃剣だよ。なんでそんな剣を使っているの？」

この世界での刀の部類は、刃剣と呼ばれ魔物と相対すれば折れやすい剣として、最弱の部類の剣と見られているようだ。多分だが製法がかなり違うだろう。

「これは大事な剣何だよ。俺の目標の人が造ってくれたね。剣に興味があるの？」

「うん！僕の家は武器屋だから。綺麗な剣だね！」

一通り見せてから剣を仕舞うと、少しだけ評価が変わってくれたようだ。この鋼斬は切れ味もいい名刀だと思っっているから、褒められ

ると気持ち良いものがある。

「これはあげられないけど、これならいいよ！」

短刀を一本抜いてミリアに渡した。

「これは短剣？」

「少しだけ違うな！これは短刀という剣だ。俺が造ったもんだから、この鋼斬と比べれば質が落ちるけど。貰ってくれるかい？」

短刀は護身武器になるし、一種のお守りとして邪気や災厄を払う守り刀とも言われているから、護つてという部分にも繋がって丁度良いだろ。

「これも綺麗な剣だ。でも、貰っていいの？」

「武器屋の娘ならば、お粗末かもしれないがな」

「絶対お返しするね！」

「そいつは心待ちにさせて貰おう！」

少しだけ顔を赤くさせたミリアがいたがまあいいだろ。

女の子に渡すプレゼントが武器というのはいいのだろうか？

「あら。ミリア良かったじゃない。確かに綺麗な剣よね！」

「だったらクレハにもあげるよ！」

「いいの？」

「まだ一本あるし、必要とあらば手に入ればいいからそこまで問題ないだろ！」

サーベルウルフに刺さりつぱなしの短刀を抜いて、刀と短刀を拭いて鞘に納めた。もうタオルが血まみれ状態だ。

しばらくすると結構年の云っついていそうな爺さんと巨大な鉄球のついたフレイルを持参した眼鏡を掛けた女性が部屋に入ってきた。

かなり慌てた感じになっていたが、全員を見ると少しだけ落ち着いた。

「クレハ無事だったか！」

「グラドル様、エイナ様すみません！石碑をオルシエ護れず賊を逃がしてしまいました」

「そうか、しかし2人が無事で良かった。変わった成りの知らぬ者がおるが」

一瞬の殺気を感じて後ろに跳び退いた。
何なんだこの爺さん。

「あなた何でいきなり下がっているの」

「気付いていないのか？」

後ろの女性もフレイルを構えていて、全然気が抜けない。

「あ！彼は私をここまで護ってくれた人で、普通の剣で十神器の攻撃を防いぐ事ができた人よ！」

「それに、聖神剣ブレイブセイドの担い手だよ！僕も見た！」

「何！？その方の名を何という」

後ろの女性も手を口に持って行って驚いているようだ。

「えっと……レイジ・カミシロです」

既に自分の許容量をオーバーして考えが少し纏まらなくなってきた。解説付きの情報が凄く欲しい。

「あの～お二方がここに来たと言う事は、町の被害や魔物の掃討が終わったのですか？」

「おお！突然魔物の数が減り弱体化した事であっさり片付いたぞ。して先ほどの話は真か？」

クレハが持つ杖を見た後でこちらを疑うように見ている。手に持っている刀を見て何かを見定める目になった。

さっきの聖剣を出せばいいのだが、出し方がよく分からないからどうしようもない。

話を聞きたいが、今は忙しいと言う事で話は明日となり客室に案内された。

その時にベルにだけ部屋に呼んで話を聞くことにした。大体の事はしっかり話してくれそうだからだ。

「まず聞きたい事がある！」

「なによ！」

「この世界やこの国の名前なんだ？てかここは何処だ？」

ベルが空中でズッコケた。

「何でそんな事も知らないのよ！」

「俺の衣服を見れば分かると思うが、俺はこの世界出身の人間ではない。だから色々な事を知りたいんだ！」

少し悩んだ後に「分かったわ」と言っただ話してくれた。

「この世界はエルフォニアと呼ばれる世界。そしてここは、聖王国家フェリアスで第二都市エルミナに構えるパルトナ大神殿。初代聖杖の巫女が創り出した国と言われているわ」

十神器の話になった。

十神器は、古の魂を継ぐ者の元に現れる。

三聖器と七神器の神器を継承されし者達を継承者又は担い手と呼ばれ、アステルと呼ばれる神が武具を保管し世界の均衡を執っている。おそらく話した神もアステルだろう。

継承方法は2つある。十神器に適合できる資質を持つ者で、神器がそれぞれが強い意志と願いを持つ者を選び選定する方法。

2つ目は、この世界にある迷宮や行動によって古の魂に認めさせる方法。

十神器の中の三聖器は、この世界にとってかなり大事な物らしい。なぜなら、他の神器より強い力を保有し世界の再生と破壊の未来を

決めるための代表者でもあるからだ。

そして神器を全て束ねる時、あらゆる願いが叶うとも言われている。

「でも何で？クレハは現れて俺のは砕けたんだ」

「単に資質があっても神器に認められていないか、何かが足りなかったかと思うわ。十神器は秘めた願いが発動に必要なと言われているから」

「秘めた願いつてなんだろう？」

そして三聖器の詳細は・・・

クレハが持っている聖神杖ファルトカウルは、この国の至宝のようだ。混沌に包まれた世界に光を与え、聖杖の巫女と呼ばれた女性が持っていた。パルトナ神殿はその女性の名から取り、世界に光を与える為に設立されたらしい。

俺が持っていると思われる聖神剣ブレイブセイドは、聖剣の勇者と呼ばれた人が持っていた。その至宝としていた国は長い歴史の中で滅んだらしい。国の名前も残っていない為に詳細は不明。

聖神槍グレイルソルドは、まだ担い手は分からない。意を組む国の名前はバルガンシア帝国で、聖槍は戴冠式の日継承すると言われている。おそらく聖槍の英雄の名を継ぐ人物はその人になるだろう。

「へ〜あんな杖がね」

なんか微妙に食い違っている気がするが、古の時代の話みたいだから書物も残っていないのだろう。

その辺も調べてみる必要があるかもしれない。

「この話を聞いてそんなに軽い反応なの」

「あの時はよく分からなかったが、ようは強い武器なだけだろ。使
い手がお粗末なら脅威とは言えないからな」

クレハの最後の魔法は凄いと思ったが、あの殺気の出し方から言っ
て爺さんと戦えば一瞬で方が付くのではないかと思えた。あのフレイ
ルの女性もかなり戦い慣れている気がした。

神器という存在以上に技量が勝れば、或いは油断に付け込めれば勝
てる事を自分が証明してみせた。

もし爺さん達と戦ったならば俺は殺されていた。まだ俺には人を殺
すという覚悟が定まっていない部分もあり、躊躇しないだろう2人
との絶望的な差でもある。なにより、魔法という今までにない常識
の差も大きい。

「まあいいわ。十神器は創世記以来、全てが同じ時代に揃った事は
ないから何とも言えないわ」

あの時！アステルは、揃ったと言っていたから全神器が揃ったか、
担い手の資質を持つ者が揃ったのかのどちらかと考えるべきだろう。
だが憶測だから、言う気はない。

そして、話の中で一番気になったのは“あらゆる願いが叶う”だっ
た。

俺が元の世界に戻る方法があるとしたらこの方法かもしれない。

「魔法についてはどうなんだ？ベルは風を飛ばしていたよな！」

「魔法に関しては適正が無いと使えないけど、魔術付加を使って

いた時点で魔力は高いと思うわ」

何か含みがある気がしたが、もっと気になっていたキーワードが出て来た為にすぐに聞く事にした。なぜなら、自分が使う能力の正確な情報は戦闘においていかに大事か教え込まれていたからだ。

「さっきから気になっていたんだが、魔闘術や魔術付加っなんだ」

もしかしたら戦っている時に感じた力の流れのがそうなのかと辺りは付けていた。

武術での組手時に、血管を流れる血のようにまた別の物が流れている感覚があった。落ち着いてみれば、今までと異質すぎてかなり分り易い。それがどういった事が起きるのか予想はできても結果はよく分らない。

「簡単に言えば魔力を体に纏わせて戦う技法ね。これは魔力と武術に精通していればできる人はいるんだけどかなり少ないわ。武器に流せる人間なんてさらに減るわね。できる人なら大体は有名になっているから何処の国でも引っ張りだよ」

その珍しい技法をしていても、あっさり武器破壊をして来るのが神器レベルと言う事なのか？

今やってみれば、かなりお粗末な流れだったと感じたことで未完成だと確信している。完成していれば弾けたのか、何もせずに普通の剣で迎撃していれば軌道をずらす事もできずに、体で受ける事になっていたのではないかと簡単に想像できた。

「それじゃあ・・・不破とか不滅とかもそう言った魔術か？」

「全く別物よ。魔術装飾って呼ぶんだけど、武器に能力を付加する

技術よ。不破は武器を丈夫にして破壊をふせぎ、不滅は状態の維持をも可能とする。他にも鋭利で切れ味を上げたりとか沢山の装飾があるわ。名の高い武具は霊器とも呼ばれているわね」

それは、かなり欲しいな。血をふき取っても刀の切れ味は少しずつ落ちていくから、不破だけでもできればかけておきたい。

出来なくても鍛冶場でも行って研ぎ直したい。確かミリアの家が武器屋と言っていたから借りれないかな？

もし報酬話や交渉事ができそうなら頼んでみるか。

こういったのは、相場が高いのが当たり前だからな。

次の日、片付けもあるだろうに、この神殿のトップ2の2人が目の前にいる。

教祖の位にいるグラドルさんと神殿官長のエイナさんらしいが内容が困った。

今回の報酬をくれてやるから、曰くこの国で働かないかとか言うてくる。

俺が魔闘術や魔術付加が出来るだけでも人材としてはいいらしい。

異世界人の話もベルから伝わっていたようだ。

その上昔の言い伝えて、聖杖と聖剣は結ばれた伝説の所為で婚約まで考えているとか話が上がってきた。

正直色々あり過ぎて婚約の事を忘れていたが、ここにきて厄介警報がこれを指していたのが分かった。

「お断りします。自分の世界に戻る為の方法を探さねばなりません。その為に旅ができる冒険者になろうと考えています」

よし！完璧な切り返しだ。これならば諦めるしかない筈だ

情報の獲得に護衛報酬としてお金を貰い、魔術付加があれば刀も早

々に折れない事は分かったし問題はない。

サバイバルはした事があるから1人で生きてはいけるし、クレハとは神器とやらの巡り合わせがきつとあるだろう。

「この国から情報を探すと言う手のあるます。冒険者登録ならば、神殿騎士も兼業になっても問題ないです」

「しかし、ここに居るとクレハとあらぬ誤解を生んでしまいそうなので」

結婚は人生の墓場とか聞いたことがあるし、この話を受けるなど俺の中で警報が囁き続けている。まだ、クレハ達と自分の世界への帰還を天秤に乗せれば帰還が勝っている。

それに何となくだが、この感じに覚えがある。超特大の厄介フラグの地雷地帯をスコープなしで歩かされる感覚だ。思考の海を漂っていると、突然に空気が変わった。

「それは何かな？ワシのクレハが不服と言うのか？ワシのかわいいかわいいクレハをいらぬと言うのか。お主を全権力を使ってでも・・・」

あれこの展開どこかで・・・デジャブ？

「いつから私が、御爺ちゃんの物になったのよ！」

クレハが聖杖で殴打して黙らせた。

てか御爺ちゃんだったんだ。

「えっ・・・お見苦しい所をお見せしました。グラドール様はかなり優れた方なのですが、クレハ様とミリア様に対してその・・・」

確かに教祖の言う言葉ではない。

あれでは唯の親バカ爺さんだ。

あんなのに一瞬でも恐れたと思うと、親父を思い出して凄くムカつく。

「いや・・・もの凄く身近にそう言った人がいたので分かっています。エイナさん。今のうちに話を進めましょう」

お互いの意見調整をしながら話を進めた。

とりあえず冒険者ギルドに登録なども含めて今後の予定を話した後に、刀の鍛冶場などの情報を貰いながら話を進めた。

クレハと爺さんは血が繋がっていない事も聞いた。養子らしくこの話はあまり突っ込まない方がいいようだ。

「では、この国に非常戦闘員としての登録をしておきませんか？そうすれば、他国にあなたを取られる危険性に対する牽制になるのでこちらも安心です」

「そうですね。しかしそれでは、こちらにメリットがあり過ぎないのですか？」

「いえ！聖神剣ブレイブセイドの真の継承者ならば、あなたの未来価値のメリットの方が大きいでしょう。それだけあなた自身の価値は測りきれないものです」

成程。聖剣のステータスは予想以上に大きいらしい。その人物が国の一員になる事は外交カードが一枚手にし、国民の支持も上がって都合が良い。

それに十神器の3つが手元にあり、世界の行く末を左右するカード

ならば確かにデカいだろう。
居・食・住の他に、刀の付加や動きやすい鎧も手配してくれるなら
有り難いの一言だ。

「でも当分は聖剣については伏せてください。敵がどういった狙い
があるか分かりませんが、ここにいる人間が黙っていれば、この前の
敵意外に悟られることはないのです」

「そうですね。神鎌ビュートの所持者が情報を持ち帰ろうとしてい
た時点で、こちらも動かなくては成りません。情報が出て来た所に
よっては、敵の一人でも焙り出せるかもしれませんが」

「婚約などは当人同士の問題なので、今は否とさせて頂きますが、
それ以外は前向きに検討していくと言う事で宜しく願います。
それで良いよね！」

「そうね・・・」

なんかゴニョゴニョ言っていて聞こえないな。

「では、近い内に紹介状の手配をしますので、神殿に留まっ
てください」

「分かりました。宜しく願います」

何故かエイナさんの眼鏡が光った気がしたが、会談が終わったので
自分の部屋に向かった。

第04話 生活の基盤（後書き）

閲覧ありがとうございました。

第05話 始まりの日常

会談から三日ほどで、この世界の文字について大体覚える事が出来た。

こっちの生活に少しずつ慣れ始め、気が緩んでいたのだろう。俺にとってこの日の出来事が、周りから非常識とみられる切っ掛けの1日になるとは思いもしなかった。

今日は朝の日課の筋トレと素振りの為に外に出ていた時の事だ。

こっちに来てから感覚が鋭敏になり、目を追うことにブレを感じていたが色々あり過ぎた為に中々素振りが出来なかった。

魔力が感覚で分かっってしまう為に、流れが淀めばすぐに分り気になれば型崩れる。

本当にままならない。

そのまま素振りをした後で、面白半分に魔法を想像してやってみることにした。

魔力の流れが分かるなら、魔法も使えるのではないかと予想して水の魔法を使ってみた。

「ウォーター」待ちなさい！「ール」

水の呪文を想像で言ってみたら、水ではなくベルが出て来た。もしかしたら離れた所から見ていたのかもしれない。

「今！何をしようとしたのよ」

「・・・魔法があるならば、予想と感覚で行けるかもしれないと思

「って・・・拙かった？」

ベルが頭を抱えだして唸っている。
やっぱり、危険だったのかな？好奇心に負けた所があるからな。

「レイジもこつゆう性格だったなんて！もし本当にでたらどうする気だったの」

「水を弾を作り出そうとしたただけだから、問題ないと思ったんだけど」

その後、魔闘術みたく簡単にできるのではないかと思って使おうとした事を話した。

後始末が簡単そうな水を使った事を話すとベルが一気に疲れた顔になった。

居合いと素振りをしている所を見かけたと思えば、いきなり魔力を集め出したから驚いて飛び出してきたらしい。

「そいつはすまなかった。でも水が出なかったから熟練不足かな？」

「それは分からないわ。魔力に属性を待たない為に魔法が使えない人間は多いし、持っている属性だって4大属性の火、水、風、土のどれか一属性が殆んどだから」

つまり、魔法は色々な種類を使えるのではなく適合性のあった魔法しか使えない訳だ。俺は魔力があるが属性を持たないか、違う属性の可能性が高いと言う事かな。

「じゃあベルは風ってことか」

「私は土の属性も持っているわ。特異属性が樹の属性だから三種類ね！」

殆んど一属性ならば、ベルの三重属性は凄いいんじゃないのか？

「特異って言うのはよく分からないが、クレハは光を撃っていたよな」

光、闇、時、空に部類される上位属性が存在している。

クレハは水と光の他に初代聖杖の巫女の清の属性持っていた事で、聖杖の最有力候補と言われていたようだ。

特異属性は、先天的に持つてはいても発現には至らなかった属性が、後天的理由で目覚めた属性のことらしい。この属性は日々の生活や環境や思想で変わる為に、十人十色の才能属性を1つ持つとされている。

部類として、魔力を使う特質系と魔力を使わない体質系の2種類がある。

目覚める事はかなり稀だが、遺伝的要素も多分に含まれる為に親兄弟の属性と似かより易い。調べる為にはギルドに行かないと分からないようだ。

「それじゃあ、それまで魔法はできないと言う訳か？」

「八属性でいいならば、私が見たあげるわよ！」

「そいつは頼もしい。だが三日前に調べて欲しかった」

話ながら、ベルが体に障り魔力を体に流しているのが分かった。とても暖かく感じ心地よい。

「レイジは私と同じ風とこれは……空属性！」

「なんでそんなに驚いているの？」

「空属性は、国内でも数人しかいないほど希少な属性なのよ。神殿内にも一人もいないわ」

空間の壁を作ったり捻じ曲げたりすることができる空属性は、かなり強い属性だが扱いが難しいらしい。ベルの魔法を教えて貰う為に、風の方を重点的に覚えて行く事にした。

「そろそろ朝食の時間ね」

「そつだな！食堂に行くか！」

食堂で一緒にご飯を食べている時にクレハと合流した。

終わる頃に、町も神殿工房も落ち着いてきた事でエイナさんから紹介状が送られてきた。これで、刀に不破を掛けて貰える。工房の主がミリアの父でランスさんと言うらしく、クレハも着いて来る事になった。

町を歩いて行くと人垣が出来ていた。

「なあ……あれはなんだ？」

「何かあったのかしら？」

俺とベルが話をしながら、興味本意で近付いた。その時だった。

「町の中でいきなり闘いを挑むなんて、何を考えているだ」

あれ？この微妙に高い声と男言葉はなんか聞いた事があるような。横を見るとベルが片手で顔を覆っていた。

この行動で確信に一気に繋がった。

「さて・・・確か神殿工房はこの先だったよな」

「そうよ・・・この先が目的地・・・」

「ちょっとベルもレイジもどこ見てるのよ！助けないの？」

「だってさあ…なんか関わったらいけないと警報が騒ぐしな」

「ミリアなら大丈夫だと思うけど・・・相手があれだし」

「あの2人だから余計に助けようよ！」

ミリアの前に居るのは身長の高い色黒の髭もじゃで若いドワーフと長身に頭に角が生えた鬼人族の男だった。

鎧もいていることから外から来たことは分かるが、何故か因縁を付けている。

「ドワーフの方はレイビス、鬼人族の方はラルゴと言うんだけど」

レイビスの方は、これから行く工房のライバル関係にある息子で、神殿工房の筆頭になった事を根に持っていて、その娘のミリアに対しても目の敵としている。

ラルゴの方は神殿騎士の副隊長の従弟らしいが、粗暴で力の強い相

手を探しては勝負を挑んでいるらしい。
どう見ても、ラルゴの方はミリアと戦いたいが為に喧嘩を売ってよ
うにしか見えない。

「お前に決闘を申し込んでいるのだぞ！」

「受けないのか弱虫！なぜ神槌がお前のような半端者を選んだんだ
！」

何か因縁のつけ方が凄く腹が立つような気がした。
半端者と言われて目に見えて元気がなくなっているし。

「あの因縁のつけ方ってどうゆう意味なんだ」

「ハーフは忌子なのよ。ドワーフに限った話じゃないのだけど、多
種族同士が子供を成してもどちらかの種族しか普通は生まれないの
だけど、偶にどちらの特徴も持っている子供が生まれるの。神槌が
ドワーフ族の至宝なのにハーフが持っているなんて許せないの
でしょ。工房筆頭の話と重なる時期に、突然神槌を手にしたから余計に
問題が大きいのよ！」

忌子は基本的に能力も両親の力の平均的な値に成り易い為に、ドワ
ーフの血を引いていながら力が弱く成り易い。ドワーフの身長は高
くならない為に、女性は低身長で器用な女性が美德とされる。確か
に、ミリアの身長は既に高くなり始めている。

「生まれとかしか見れないなんて、思慮の浅い事だな」

「最近ハーフも認められてきているけど、忌子は子供を殆んど生
むことがないと言われている所が問題なのよ。ミリアは違ったけど

大体的場合は、体が弱いのが通例なの」

昔は、忌子の扱いがかなり酷かったようだ。やっぱりどこの世界も見た目の違いで、排斥したくなるのが世の常なのかもしれない。

「根は深いと言う事か」

「それだけに、レイジから自分で造った武器を貰ったのは嬉しかったみたいよ。それが例え知らなかった事だと知った後でも」

「何の話だ？」

「ドワーフへのプロポーズの仕方が、自分で制作した物を送り合い互いに交換し合うからよ。ハーフのミアには、望んでも異性から貰う事がない思っていたことなの」

ドワーフにとってモノ造りが基本であり、自分で入手してきた物で制作し送ることで、実力と技術とセンスを見せて認めさせる意味合いも強くもっている。

魔物が蔓延る世界な為に、弱ければすぐに死んでしまう。

ドワーフは子孫や弟子に技術を託すとされているから子孫を残せないから毛嫌いされ、次点で造る事が出来る人間も同じ意見の部分がある。ミアが優遇されているのは、神槌ゆえと言える部分が多い。

「補足すると渡す物にも意味があるのよ。短剣ならば、あなたを愛し支える」

「ぶっ！」

短剣は最も最初に造る武器な為に、当人の技量レベルが分り易いこととでこの言葉がついたようだ。

「本当に、まだ成人していない14歳でよかったわね！」

あの顔を赤くしていた理由はそうゆうことだったのか。いや！渡したのは短刀だからニアミスだよな。成人してたら、知りませんでしたじゃすまされない所だった。

「でも知らなかった事は、ミアも分かっているんだろ。クレハにもあげたし」

「うん！でも大事に持ち歩いているみたいよ。私も持っているしね！」

クレハが短刀を見せながら言った。

「そいつはどうも！ラルゴの方の言い方は、とりあえず戦わせるとしか聞こえるのはなぜだ？」

話題を変えることにした。これ以上は泥沼化しそうだし、ミアも分かっているならそこまで考えなくていいだろう。下手に返してくれとか言ったら泣かれそうさ。

ベルの目が逃げたわねと言っているがしょうがないだろう。

「鬼人族は強さを重要視しているからよ」

同じ力の強さならば、竜人族を除けば鬼人族が一番腕力に優れた種族で魔法はからっきしらしい。

力があれば認められる所はまさに弱肉強食な所があり、そうゆう意

味ならば獣人族も近い所があるらしい。

「この世界には知らない事がいっぱいあるんだな」

「そうね！ミリアの事も含めて、少しだけ考えて行動しなきゃダメよ！」

「何か含みがあるが了解した。でも行動してから考える事が多いから難しい上に、こっちの知識が不足しているのも致命的だ！」

何が良くて何が悪いのかが分からない所がある。

これでも文字を読めるようにする為に、本を借りて色々読んで実際を見て当て嵌める事で覚えているのが現状だ。

「そんな短剣で俺と戦う気か」

「この短刀を造った人まで莫迦にされたくない。これは、僕の好きな人が造ってくれた物だ！お父さんも認めてくれた！」

え！？ミリアの父ってこれから行く筆頭だよな。

爺ちゃん曰くあの短刀はまだまだ！と言われた物だから何を認めただんだ？

「半端者に渡すなんて何処の変わり者だあ！」

「それは、聞き捨てられぬな」

ハイ！俺です。

随分と棘がある気がするが、槌と短刀じゃ武器としての差が出るだろ。槌なんかで横っ腹を叩かれれば一発で折られてしまう。

「なあ何で、神槌を出さないんだ？」

「街中のこんなに人が集まっている所で、出せるわけないじゃない！」

確かにこれだけ人がいたら重量級の武器は危険だし、周りに人が集まり過ぎて相手側も引くに引けない感じになってきている。
今のミリアの状態は、武器なしよりもある意味危険だ！

「俺のせい・・・なんだよな」

人を掻き分けながらミリアの横まで歩いて行くと鬼人族の方が睨みつけてきた。

「お兄さん。どうしてここに？」

「そろそろ打ち止めにした方が良くないのか？人も集まっている事だし」

「関係ない！俺は強者と戦えればそれでいい。お前が代理になるのか」

「そのなまくらを押し折られなくては退け！」

「いやだね！俺が纏めて相手になるよ。なまくらの切れ味教えてあげる」

「ちょっと！止めるんじゃないの！」

「この鋼斬を莫迦にしたあいつは斬る！まあここでは狭いけどな」

親父みたく薄皮を切り裂いて、生と死を噛み締めさせてやる。

「ふん！この先の広場で待つ。逃げるなよ！」

2人が離れて行くと人垣も徐々に解散していった。

第05話 始まりの日常（後書き）

魔法関係の設定と色々な世界観を出して行きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2564z/>

シンクに選ばれし者

2011年12月11日12時52分発行